

日本消化器外科学会雑誌編集後記

今年の夏は、ベトナムの首都ハノイにある中央病院に、小児心臓外科医 佐野俊二教授に誘われ出かけた。病院に到着してまず感じたことは、現地の医師は英語が堪能かつ饒舌であることであった。早速、iPad を見ながら手術の打ち合わせをした。実際的な手術書で、図も美しく、多種類の重い教科書や手術書を持ち歩く必要がなく、改めて iPad の威力を実感した。手術は、鏡視下右半結腸切除を現地の先生と一緒にこなした。手術以外にも、“安全な鏡視下手術”という題目で講演をし、難症例検討会にも参加した。消化器外科のチームは知識も豊富であり、手術手技もしっかりしており、その他の若い医師達も非常に熱心であった。ハード面が充実すれば、すぐにも日本の医療技術に追いつくであろうと感じた。ハノイの最終日には日本国大使館を訪問し、大使との時間を持つことができた。短時間ではあったが、“日本の医療のアジアでの活かし方”について熱く議論することもできた。

さて、本号では 10 編の症例報告が掲載されており、肝胆膵の腫瘍 4 例、上部消化管の腫瘍 2 例、その他の腫瘍 1 例、良性疾患 3 例と幅広い疾患で構成されていた。FLC 症例では巨大かつ多発する腫瘍に対して動注化学療法、門脈塞栓術の後、肝切除+ラジオ波焼灼を組み合わせることでこれらを切除、その後の再発に対しても積極的に切除することで長期生存が得られた。後腹膜悪性腫瘍症例では、約 4 年の間に 4 回の切除を繰り返し行い、その後 3 年無再発との報告であった。治療された先生方の熱意、その先生方を信じ、繰り返す手術に耐えられた患者さんの忍耐がこのような良い結果を生み出したのであろう。これらの症例報告を読み、またハノイの若い医師達と接することで、外科医である我々は、常にあきらめないで治療を続ける熱意が重要であることを改めて学ばせていただいた。

(竹山 廣光)

2013 年 11 月 1 日